

ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ（1）

——誰がダルクに満足しているのか——

○東京大学 伊藤 秀樹
四天王寺大学 平井 秀幸

1. 目的

日本でほぼ唯一の民間の薬物依存リハビリテーション施設であるダルク（DARC: Drug Addiction Rehabilitation Center）には、「薬物依存からの『回復』を目指す」ことを共通項として、非常に多様なライフコースを歩んできた人々が集まってくる。ダルクの利用者たちは、主に依存してきた薬物も、生育歴や学歴も、ダルクを利用することになった経緯も、刑務所・精神病院・福祉事務所などの利用経験も、一人ひとり異なっている。

そしてダルクでは、創設者の近藤（2000）が述べるように、「誰が回復するかわからない」という理解がなされてきた。後続の報告にもあるように、「回復」現象を経験的に同定することは困難である。しかし、どのような人々がダルクに居心地のよさを感じているのか、つまり誰が「回復」に向けてダルクにつながり続ける傾向にあるのか、という点には接近することができる。そこで本報告では、誰がダルクに満足する傾向にあるのかについて、計量分析をもとに検証する。

2. 方法

本報告では、2008年1～3月に全国のダルク関連施設（運営団体44か所、施設66か所）の利用者に対して実施した質問紙調査（郵送自記式）の分析を行う。有効回答者数は445名（男性397名、女性44名）で、ダルクの生活全般に「満足している」「まあ満足している」と回答した者は、合計で42.2%であった。こうしたダルクの生活全般の満足度と、性別、年齢、学歴、ダルク歴、主な依存薬物、経済基盤（生活保護の受給）、矯正施設の入所経験、幼少期の経験、精神症状などとの関連性について検証する。

3. 結果

ダルクの生活全般の満足度を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、通所者、ダルク歴が長い人、15歳時の階層を上位に答える人、幼少期に心理的虐待を受けていなかった人、不安感・不眠などの精神症状が少ない人ほど、ダルクに満足する傾向があることがわかった。一方で、性別、学歴、主な依存薬物、生活保護の受給の有無、刑務所・少年院への入所経験などについては、ダルクへの満足度と有意な関連は見られなかった。なお、精神症状の数はダルクの他のメンバーやスタッフへの満足度とも有意な負の関連があり、精神症状を抱える人々はダルクでの人間関係に不満をもつことで、ダルクの生活全般にも不満を抱いている様子が見出せた。

4. 結論

ダルクは、低学歴、矯正施設への入所経験、生活保護の受給などのスティグマとなりうる経験をもつ人々にとっても、他の利用者と同様に居心地のよい空間となりうるということが推察される。しかし一方で、幼少期の恵まれない家庭生活や被虐待経験がダルクへの不満と関連をもつことについては、留意する必要がある。なお、精神症状がダルクでの人間関係の不満を経由してダルク生活の不満につながるという知見からは、精神症状を抱える人々のダルクでの「回復」に他のメンバーやスタッフとの人間関係を円滑に行えるようなサポートが有効であることが示唆される。

文献 近藤恒夫，2000，「薬物依存を越えて——回復と再生へのプログラム」海拓舎。